中頓別町

コミュニティデザインの手法を活用した
人生100年の学びの拠点づくり

文部科学省 令和４年度
新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業 成果報告

目次

1 章 はじめに　1

1-1. これまでの経緯　1
1-2. 目的　2

2 章 中頓別町について　3

2-1. 地勢　3
2-2. 歴史　3
2-3. 人口　4
2-4. 産業別人口　4
2-5. 交通　5
2-6. 教育　5

3 章 学びの環境整備のプロセス　9

3-1. 学びの環境整備のための流れ　9
3-2. 事例調査および視察　10
3-3. ヒアリング調査　11
3-4. 町民および教職員との協働　12

4 章 学びの環境整備の方針　14

4-1. 敷地について　14
4-2. 人生 100 年の学びの拠点の考え方　15
4-3. 義務教育学校について　17
4-4. ビジュアルイメージ　20

1 章 はじめに

1-1. これまでの経緯

中頓別町では自然と英語を柱に、地域の特性をいかした町独自の教育に取り組んできました。特に幼児期には、豊かな自然の中であそび、専任の ALT から生活の中で生きた英語を学べる環境をつくってきました。

また町の人口もコンパクトで町民は顔見知りの間柄です。子どもたちの間にも年齢をこえて友達や兄弟のような関係性があります。

これまで幼児教育で大切にしてきた価値観や考え方をその先の教育にも一貫してつなげていきたいという想いや、あたたかなつながりのある地域特性など、中頓別町で幼小中一貫の学校づくりを目指したのは無理のない流れでした。

その折に、老朽化により中学校校舎の建て替えの時期が近づいてきました。そこで、校舎の建て替えをきっかけに、幼小中一貫の学校づくりの検討を進めました。検討をスタートしたものの、小中学校の校舎を一緒にするか別々にするかなど、一貫校の形式や施設整備についての議論が先行し、関係者の合意形成が難航した時期もありました。

検討を進めていた建設構想を一度仕切りなおし、私たちは地域でどんな教育を実現したいのかという根っこの部分から協議を進めることにしました。また、関係者だけでなく、町民の方々とも話し合いながら、参加型で事業を再スタートさせました。

町民や教職員とともにワークショップの場で話し合いながら合意形成を図り、新しい学校づくりに向けた基本構想を策定しました。また、今回の文部科学省の補助事業の採択を受け基本計画を策定しました。今後はさらに具体的な検討を進めていきます。

自然と英語を柱としたまち独自の幼児教育に取り組む

▼

幼児教育の取り組みをつなげるため幼小中一貫の学校づくりが目指される

▼

中学校校舎の老朽化による校舎の建て替えをきっかけに検討を進める

▼

小中一貫の形式や施設整備の議論が先行し、関係者の合意形成が難航。
施設構想を一度、仕切り直すことに…

▼

施設整備の検討の前に、改めて地域における学びの場の在り方について
教育関係者や町民とともに協議を開始

▼

【ポイント】町民や教育関係者とのワークショップなど参加型で事業を推進

▼

教育関係者および町民と合意形成を測りながら、基本構想および基本計画を策定

図 . 中頓別町における学校づくり検討の経緯

1-2. 目的

中頓別町で目指すのは、3 歳から 15 歳が学べる幼小中一貫の学校にとどまらない、人生 100 年時代において子どもから大人まで学びつづけることのできる生涯学習センターとしての学び舎です。

最新の研究では現在の中学生は平均で 107 歳まで生きると言われています。義務教育期間終了後の長い人生を、どのように生きていくのか。生涯学びつづけながら急速に変化し、予測することが難しい未来を生きぬく人生を支える場が地域に必要だと考えています。

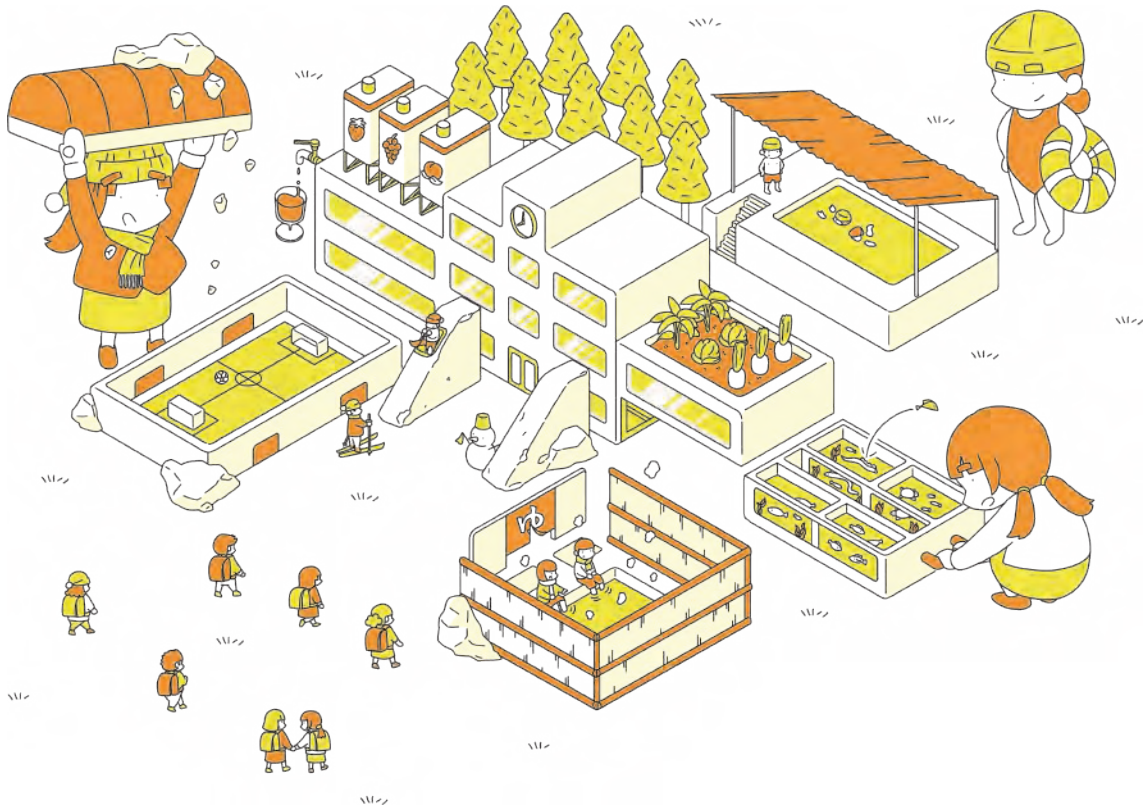
そのため、本事業では学校づくりだけでなく、生涯学習センターの中に学校を組み込み、子どもたちの活動が地域社会に展開するような新しい時代の学びの場の計画づくりを目的としています。

また、コミュニティデザイン(※)の手法を活用して、構想・計画の段階から住民参加型で検討を進めることで、町民と丁寧に対話をしながら、地域で一丸となってプロジェクトを推進しています。

本事業を通して、町民と協働して新しい学びの場づくりを進めることで、大人から子どもまで生涯学ぶことのできる人生 100 年の学びの拠点づくりを進めます。

※ コミュニティデザインとは

デザインの力を使って、地域の課題を地域に暮らす人たちが解決するよう支援すること。人がつながる仕組み作りや担い手育成などの「見えないデザイン」から、その中で生じたプロセスや成果を見える化する「見えるデザイン」まで多岐に渡る。



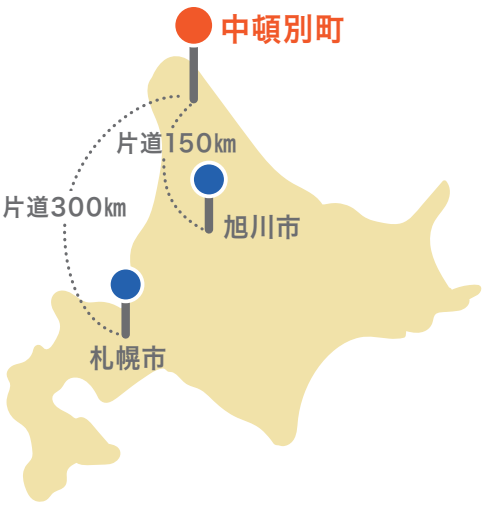
2章 中頓別町について

2-1. 地勢

～北緯45度～ まちのシンボルピンネシリ岳

中頓別町は、北海道の最北に位置する宗谷総合振興局に属し、管内の南東部、北緯45度線上に位置し、398.51㎢の面積を有します。東は枝幸町、北は浜頓別町、西および西南方には、幌延町と上川支庁管内の音威子府村に接しています。

山々に囲まれた山岳部にあり、町の中央部には標高703mの敏音知（ピンネシリ）岳がそびえ、西部には天塩山地に連なる山々、東部はホロヌプリ岳につらなる北見山地の裾野に位置します。これらの山々に水源を発する多くの支流を合わせ、頓別川と兵知安川を形成。町の中央を北流して市街地南部で合流し、頓別川としてオホーツク海にそそいでいます。この流域が平坦地および段丘地帯となり、酪農を主とする農業地帯および集落・市街地を形成しています。



2-2. 歴史

砂金の発見によりはじまった開発

まちの開発は、1897（明治30）年頃に頓別川の支流で砂金が発見されたことに始まりました。当時の頓別川一帯には、砂金採取に入り込む者が急増。その後、開拓が本格的に始まります。

年表

- 1900（明治33）年
  開拓が本格化。翌年楢原民之助により中頓別の農耕が始まる。
- 1916（大正5）年
  宗谷線鉄道（旧天北線）が中頓別まで開通。翌年中頓別郵便局や小学校ができる。
- 1949（昭和24）年
  中頓別が村から町へ。町立国保病院や農業高校ができる。
- 1956（昭和31）年頃
  農業は馬鈴薯の生産から、酪農に力を入れるようになる。
- 1975（昭和50）年頃
  養護老人ホーム、町民センター、図書館、郷土資料館、寿公園など様々な公共施設が整備。
- 1989（平成元）年
  鉄道が廃線となり、代替バスの運行が始まる。
- 2019（令和元）年
  町開拓110年・町政施行70周年を迎える。

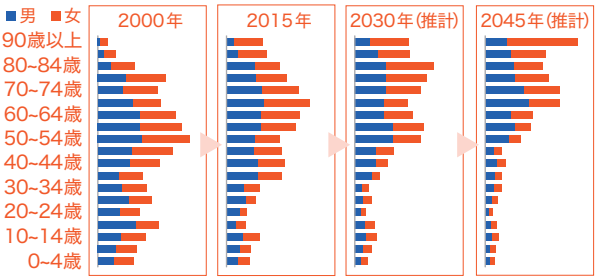
2-3. 人口

約1500人程のコンパクトなまち

2015（平成 27）年以降、年少人口及び生産年齢人口は、同程度の割合で減少を続けています。老年人口は 2010（平成22）年から緩やかに減少傾向に転じていますが、2025（令和 7）年には生産年齢人口を超え、最も多い人口構成区分となる見込みです。「自然増減（出生と死亡の差により生じる増減）」については、自然減の傾向が続いています。「社会増減（転入と転出の差により生じる増減）」についても転出超過の傾向です。

表 . 年齢 3 区分別人口の推移

	年少人口	生産年齢人口	老年人口
2000 年	301	1,585	632
2005 年	261	1,361	667
2010 年	207	1,057	710
2015 年	158	918	680
2020 年	124	762	662
2025 年（推計）	99	618	621
2030 年（推計）	75	516	558
2035 年（推計）	55	418	503
2040 年（推計）	42	314	462
2045 年（推計）	32	227	420



2-4. 産業別人口

農業、医療・福祉が基幹産業

2015 年の男女別では、男性で多い順に「農業」、「公務」、「医療、福祉」となっており、女性では「医療・福祉」、「農業」、「卸売業・小売業」の順となっています。なお、2010 年から 2015 年の 5 年間で、「分類不能の産業」が増加しています。

表 . 老年人口の将来推計

	65~69歳	70~74歳	75~79歳	80~84歳	85~89歳	90歳以上
2020年	148	133	113	64	44	16
2030年	133	108	96	91	50	31
2040年	126	104	92	108	99	58
2050年	114	112	95	75	77	75
2060年	88	106	85	82	59	78

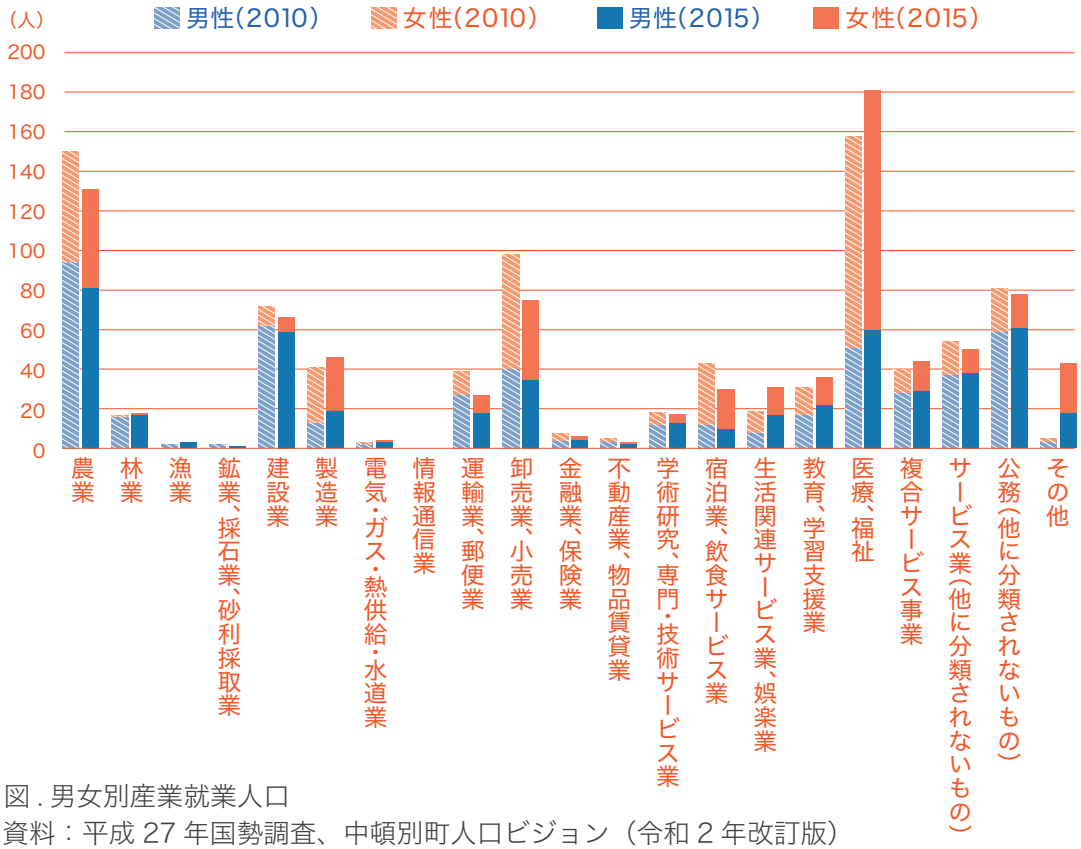


図 . 男女別産業就業人口
資料：平成 27 年国勢調査、中頓別町人口ビジョン（令和 2 年改訂版）

2-5. 交通

町民と協働したライドシェア事業

中頓別町は、最も近い空港がある稚内市までは約100㎞、旭川市までは約170㎞、札幌市までは約310㎞です。1989（平成元）年に鉄道が廃線となり、地域を運行している路線バスは１路線のみです。そのため、多くの町民が自家用車を保有していますが、高齢になると運転が難しくなる場合もあります。新たな交通体系の確保として、自家用車の乗り合いを実施するライドシェア事業に取り組んでいます。

表 . バス・車の移動所要時間

種類	経路	本数	時間
バス	旭川～鬼志別間 旭川ー音威子府ー小頓別ー中頓別ー浜頓別ー鬼志別	往復１本	４時間
	旭川～枝幸間 旭川ー名寄ー音威子府ー小頓別ー歌登ー枝幸	往復２本	３時間 30 分
車	札幌～中頓別間		５時間
	旭川～中頓別間		３時間

2-6. 教育

まちの特色ある取り組み

①英語教育

認定こども園は、週３回 ALT による「英語であそぼう」を実施しています。また、小学１・２年生は年間 15 時間程度、３・４年生は 35 時間の「外国語活動」、５・６年生は 70 時間の教科「外国語（英語）」を実施しています。中学校では、令和３年度から ALT1 名が常駐し指導しています。

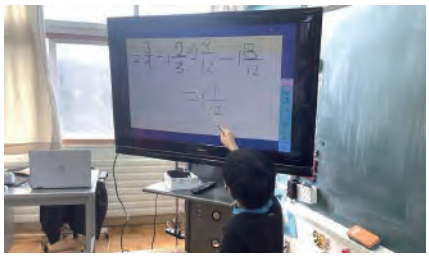
また、夏休みに小学校３年生以上の希望者を対象とした「英語キャンプ」や、中学生の希望者を対象とした「ハワイ語学研修」を実施しています。

②森のこども園

町の自然に親しみながら、遊びや体験を通して豊かな感性や自分で考える力を育む取り組みです。３～５歳児を対象に、ピンネ、鍾乳洞、ふるさとの森などで、そうや自然学校などの協力を得て実施しています。

③ICTを活用した学習サポートの推進

令和２年度、小中学校ともにGIGAスクール構想に基づき、校内のネット環境の強靭化を実施するとともに、児童生徒や教職員にひとり１台端末（タブレット）を提供しました。



④なかとん学習塾

小学校４年生以上を対象に週２回（火曜日は算数、金曜日は隔週で国語と英語）、町民センターで実施しています。学力の向上を目指し、認定こども園長と教育長、ALTにより学校の授業を補充発展させる指導をしています。

⑤放課後子どもプラン

放課後子どもプランでは、放課後児童クラブと放課後子ども教室を一体的に運営しています。小学１年生から６年生を対象に、様々な体験交流を通して異学年の子どもや地域の大人との交流を深め、子どもたちの豊かな人間性を養うことを目的としています。

⑥夢と希望を！感動体験事業

旭山動物園や民族共生象徴空間ウポポイの見学、陶芸やラフティング、プロスポーツ観戦等を体験する取組みです。子どもたちに本物の感動を伝えるとともに、学習の動機付けにつなげています。

児童生徒数

中頓別町の小中学校の児童生徒数は下記の通りです。現在は各学年１学級ずつ設けられています。開校を予定している令和８年４月の児童生徒数は合計 89 名（小学校児童数 63 名、中学校生徒数 27 名）と予想されています。

表 . 中頓別小・中学校 児童生徒数の推移（2011～2026 年）

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023 推測値	2024 推測値	2025 推測値	2026 推測値
小学校	91	82	76	76	64	62	52	64	66	62	59	67	61	61	64	63
中学校	44	38	42	41	43	43	41	37	32	32	28	24	31	37	38	27

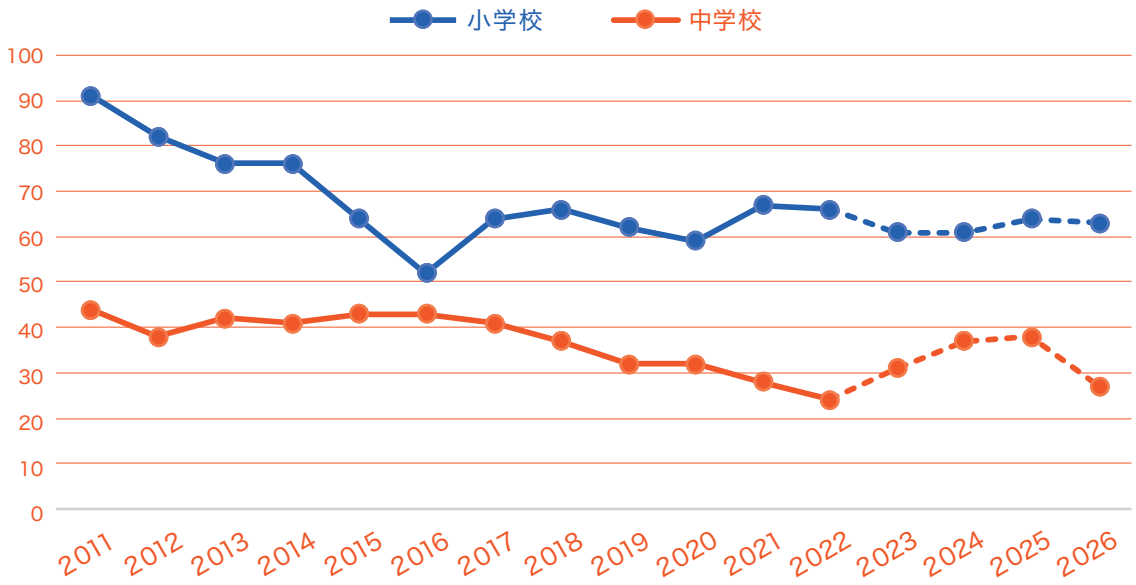


図 . 中頓別小・中学校 児童生徒数の推移（2011～2026 年）
資料：中頓別町教育委員会「児童・生徒移動集計表」（2022 年作成）

教育関連施設

中頓別町における教育関連施設は、中頓別小学校およびこども園周辺に集まっています。なお、建物の状態は、2016 年に実施された調査に基づき記載しています。

町民センター

竣工年度　1978(昭和 53)年

建物の状態　建物については落雪や凍害などによるダメージを受けている箇所が見られ、改修や対策が必要な時期に来ている。

青少年柔剣道場・郷土資料館

竣工年度　1984(昭和 59)年

建物の状態　防水の劣化が進行している。外壁フードの破損・変形、外壁クラックがある。

中頓別中学校

竣工年度　1968(昭和 43)年

建物の状態　ひび割れやモルタルの劣化など外壁に著しいダメージがある。外断熱改修など、早急に改修していく必要がある。

認定こども園

竣工年度　2002(平成 14)年

建物の状態

外観上大きな問題はない。

町民体育館

竣工年度　1966(昭和 41)年

建物の状態　劣化が極度に進んでいる。外壁の落下危険があり、安全対策をとるとともに早期に改築などの検討が必要。

中頓別小学校

竣工年度　1990(平成 2)年

建物の状態　耐震性能は確保されているが、断熱が不十分。校舎などについては大規模な改修や改築が必要な時期に来ている。

3章 学びの環境整備のプロセス

3-1. 基本計画策定までの流れ

中頓別町では、コミュニティデザインの手法を活用して町民と協働して事業を推進しています。構想・計画段階から町民と丁寧に対話をしながら、新しい学びの場づくりに取り組んでいます。ヒアリング調査、勉強会、ワークショップなど、各プロセスにおいて様々な参加の機会をつくりながら、基本計画策定に向けて協議を進めました。

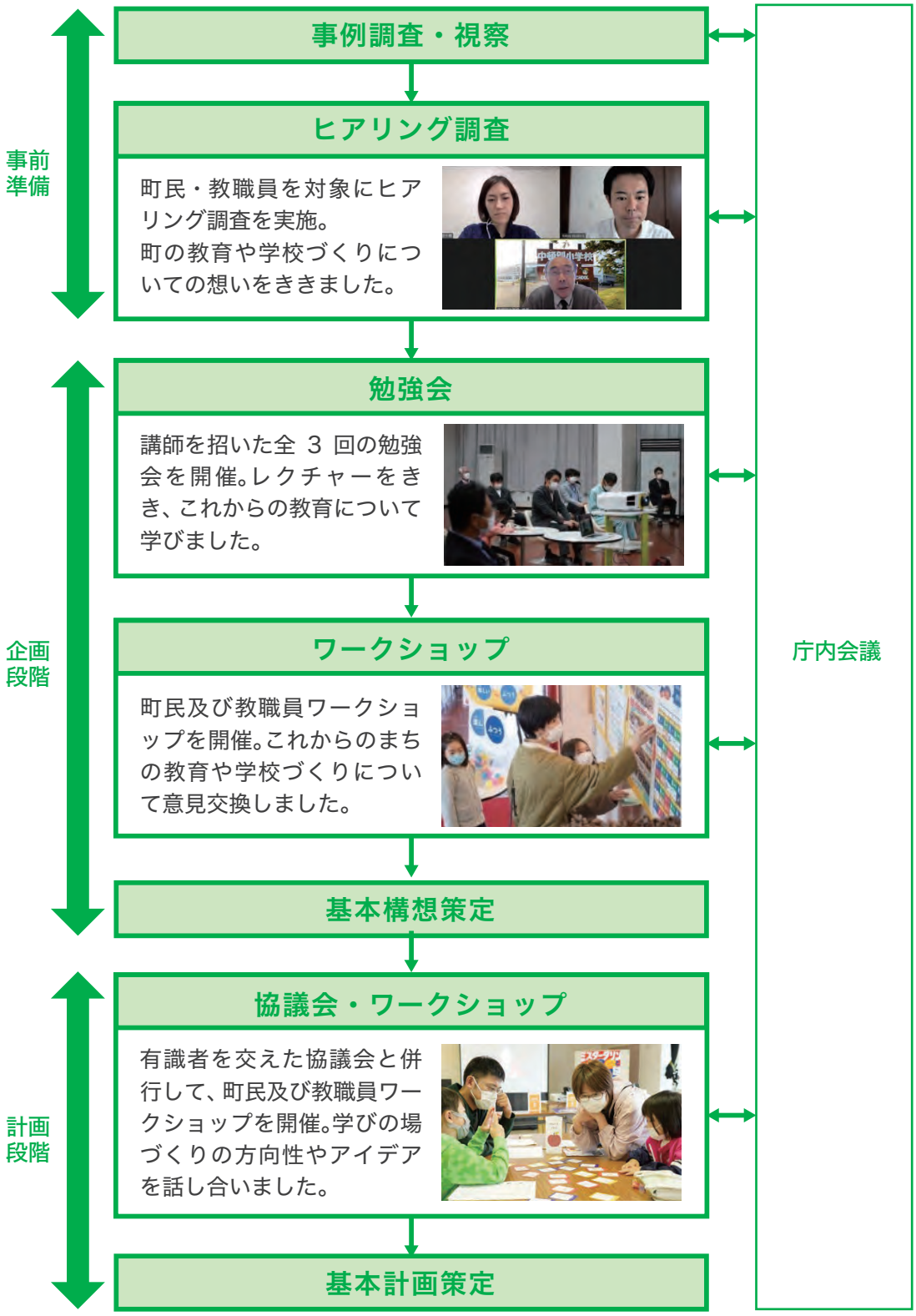


図. 基本計画策定までの流れ

3-2. 事例調査および視察

事例調査

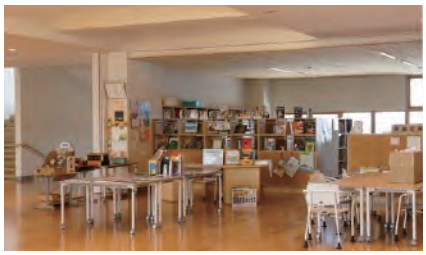
事例調査として、学習指導要領、小中一貫教育の推進、コミュニティ・スクールの推進、学校を核とした地域づくりの推進といった、今日的な教育に関わる潮流、および北海道内の義務教育学校および小中一貫校の設置動向などを調査しました。

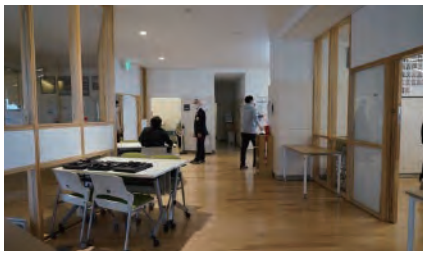
道内においては、義務教育学校が増え続けています。令和４年度には公立の義務教育学校が５校新設され、国立１校を含め合計20校となりました。

学校視察

①北海道白糠町立庶路学園

庶路小学校と庶路中学校が統合され、2018 年に開設した庶路学園を 2022 年３月 28 日に視察をしました。学校法人二葉学園と町が連携して設置運営する白糠こども園も併設されています。





②広島大学附属三原学校園

1998 年から幼小中一貫教育研究会がはじまり、今日に至るまで幼小中一貫教育を進めてきた三原学校園を 2022 年７月 25 日に視察しました。

③北海道安平町立早来学園

安平町早来地区にある小中学校４校を統合し、2023 年４月に開設予定の「早来学園」が完成したことを受け、2022 年 12 月 25 日に視察しました。

3-3. ヒアリング調査

教育関係者および住民へのヒアリング

2021年6月の3日間に、中頓別町小中学校の教職員およびPTAの保護者へ、2023年1月の4日間に、町民へヒアリング調査を実施しました。ヒアリング調査できいた意見を下記にまとめました。

好きなことや個性を尊重する

・テストで測る学力は学力全体から見て1割の「見える学力」であるが、郷土愛・心を育てる9割の「見えない学力」を大事にしたい。受験やテストのためだけに教育しているわけではない。（教育関係者ヒアリング）

多様な学び方や暮らし方に対応する

・中学校での職場体験を経験し、地元で働くイメージがついた。起業や事業承継など、さまざまな働き方をしている人から話をきくことで子どもたちの視野が広がっている。（教育関係者ヒアリング）

まちの人とともにつくる

・学校の教育は「地域と一緒に育てる」ことが大事。まちのみんなの総意で教育を行いたい。

・地域と話し合い、決定する場があれば、スムーズに連携できるのではないか。子どもにこんな体験をさせてあげたいという熱意も地域に伝わると思う。（教育関係者ヒアリング）

自然や歴史・地域に学ぶ

・森のこども園やピンネッコクラブなど、子どもを対象とする自然あそびの機会があり、とても人気である。大人も一緒に、気軽に外遊びできるといい。

・学校での部活動の種類が限られているので、料理やものづくり、職場体験などの活動が充実するといい。（町民ヒアリング）

多様な学習を可能にする多機能な施設

・現在、図書館など子どもが自習したり、集まったりできる場所があるといい。

・教室は広くゆったりしたスペースで、大きな家のようなつくりが理想。広いスペースで様々なことができ、教師が生徒の状況や授業の内容に合わせて空間を使いこなすことができると、少人数の強みも発揮できると思う。

・仕切りなどで教室の大きさを自由に変えられるといい。

・特別支援学級と普通学級の交流がある間取りがいい。（教育関係者ヒアリング）

地域の学び・活動の拠点

・裁縫のためのミシンや、工作のための道具の貸し出しなど、家ではしづらい趣味の活動ができるスペースがあるといい。

・囲碁や将棋ができる子どもたちが、地域の先輩に学べる場所と機会があるといい。

・作ったり食べたりしたことのない料理をみんなで作れるといい。

・みんなが使えるドラムやアンプ、ギターなどを置けるスペースがあるといい。

・冬に運動できる場所が限られているので、トレーニングルームなど体を動かせる場所があるといい。（町民ヒアリング）

安全・安心な施設環境

・特別支援教室の特性に合わせて、配慮しながら一緒に学びを進めることができるといい。（教育関係者ヒアリング）

・施設全体を学校職員と教育委員会事務室で見守るのは難しそう。セキュリティはしっかり検討していく必要がある。（町民ヒアリング）

3-4. 町民および教職員との協働

保護者へのアンケート調査

こども園、小学校、中学校に通うすべての子どもの保護者にアンケートを配布しました。アンケートでは、子どもたちに身につけてもらいたい力や、子どもたちが放課後や休日にできたらいい活動に関するアイデアについてききました。

勉強会の実施

全３回の勉強会「親子で語って学ぶ生き方ドリル 基礎編」を開催しました。ゲストを招いた講演会や、理想の学校について意見をきくワークを実施しました。

展示「新しい学校をつくろう あったらいいな展」の実施

新しい学校づくりに関するパネルの展示、およびこれまでに出た意見、子どもたちが制作した作品を展示しました。また来場者には、新しい学校にあったらいいアイデアをききました。

中学生ワークショップの実施

中頓別中学校の１、２年生を対象に、授業の時間を利用してワークショップを開催しました。ワークショップは、オンラインで開催し、現状の１日の使い方、理想の放課後の過ごし方などについて意見をききました。

町民ワークショップの実施

小学生以上を対象に町民ワークショップ「ミスターダリンと謎の怪人 R」を開催し、人生 100 年時代を生きる上で大事にしたい力について意見交換をしました。

教職員ワークショップの実施

小中学校の全教職員を対象とした新しい学校づくりに関する説明会と、小中学校の教職員数名が代表として参加した全２回の「教職員ワークショップ」を実施しました。ワークショップでは、新しい学校校舎や教育施設のハード面や、新しい学校施設で実現したい空間や活動のアイデアについて意見交換をしました。

中頓別学園設置協議会

令和４年８月から、計５回の中頓別学園設置協議会を実施し、新しい学校づくりに関する経緯の説明や教育理念に関わる意見交換をしました。

意見のまとめ

すべての子どもたちの居場所

- 発達の問題や学習障害、不登校、家庭の問題が生じた場合に、継続した支援ができる環境があるといい。（保護者アンケート）
- 登校しづらい子がいれるスペースや、心が落ち着くまで一緒にいられるスペースがあるといい。（教職員ワークショップ）

好きなことや個性を尊重する

- 好きなことを探求することで、自分の好きなことがわかったり、同じ趣味の人と関わることができる。（町民ワークショップ）
- 子どもの大好きが見つかる、子どもの大好きがあふれている場になるといい。（中頓別学園設置協議会）

多様な学び方や暮らし方に対応する

- 自然の中で学ぶことで、新しい植物を見つけるなど、発見を楽しむことができる。（町民ワークショップ）
- 地域の色を子どもたちと一緒に作り上げる仕組みが重要なのではないか。（中頓別学園設置協議会）

自然の豊かさを感じられる、地域特性を考慮した施設

- 木の温もりを感じる設備。（保護者アンケート）
- カーボンニュートラルに対応した学校づくりと子どもたちへの意識づけができるといい。
- 除雪はどうなるか。テラスの管理が大変そう。（中頓別学園設置協議会）

ランチルームの将来的運用を見据えた計画

- みんなでランチができるスペースがあったらいい。（教職員ワークショップ）
- カフェスペースとの統合するなどして、少人数でパーティーができるようなミニ調理室があるといい。ただ広い空間を用意するのではない、使いやすさがあるのではないか。（中頓別学園設置協議会）

居心地がよく快適に学べる教育環境

- ソファなどゆったりできる環境があるといい。（教職員ワークショップ）
- 大人と子どもが寝転べる場所があるといい。
- 一般ロビーを広くして、高齢者が話しやすいスペースを作れるといい。（中頓別学園設置協議会）

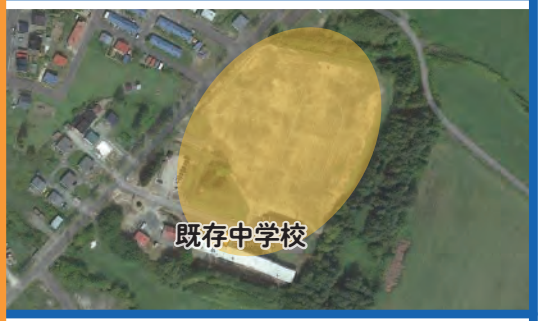
4-1. 敷地について

計画候補地の検討

中頓別中学校の老朽化に伴う改築が喫緊の課題となっています。中学校校舎の整備にあたり、中学校校舎建設用地と小学校および中頓別中学校の敷地を候補とし、想定建設候補地比較表 をもとに検討しました。その結果、A 案(現中頓別小学校を改修し、中頓別小学校の校地に中学校部門を増築する)が最適と判断しました。主な理由は次の 3 点です。

1. 施設一体型の義務教育学校が実現できること。
2. こども園との距離が近く、交流や連携がしやすいこと。
3. 町民センターを一体的に改修して、図書館など学校に併設したコニュニティ施設を整備できること。

表 . 建設候補地の比較

	新しい中学校校舎の候補地	
	A 案：小学校の敷地	B 案：現在の中学校の敷地
場所		
良い点	・中学校とこども園や小学校の距離が近く、交流や連携がしやすい。 ・町民センターなど既存の建物を改修して、図書館など学校に併設したコミュニティ施設を整備できる。	・ゆとりある敷地に中学校の校舎を新築することができる。 ・小学校や町民センターなど他の施設が近くにないので、工事をスムーズに進めやすい。
検討事項	・兵安川の浸水被害がなく、安全な学びの場を確保すること。 ・移転した既存の中学校校舎の活用。	・こども園や小学校との交流や連携をどのように図るか。 ・図書館などコミュニティ施設はどこに整備するか。
解決方法	・1000 年に 1 度の確率で校庭が 15cm 程度、水に浸るリスクがある。万が一に備え、2 階への避難経路をつくる。また、記録的な豪雨が続く時などは、事前に学校を休校にする。 ・既存の中学校校舎は高台にあるため、避難所として活用することも検討。	・オンラインも活用し、交流や連携を図るよう努める。 ・コミュニティ施設は中学校校舎とは別に市街地に整備。

4-2. 人生 100 年の学びの拠点の考え方

人生 100 年の学びの場とは、大人になっても自ら学び続け、時代の変化に対応しながら、自分なりの生き方を実践できる場であると考えています。地域の大人が学ぶことを本気で楽しんでいる環境の中に子どもたちをおき、ともに学び続けられる場づくりを進めます。

実現に向けて、対話を通して多様な価値観の中で学ぶ【共生】、わくわくすることを大切にする【好奇心】、一緒にやってみる【共創】を柱に、地域の資源である【環境・自然】を活用し、【対話・協働】をベースとした新しい時代の学びを進めます。

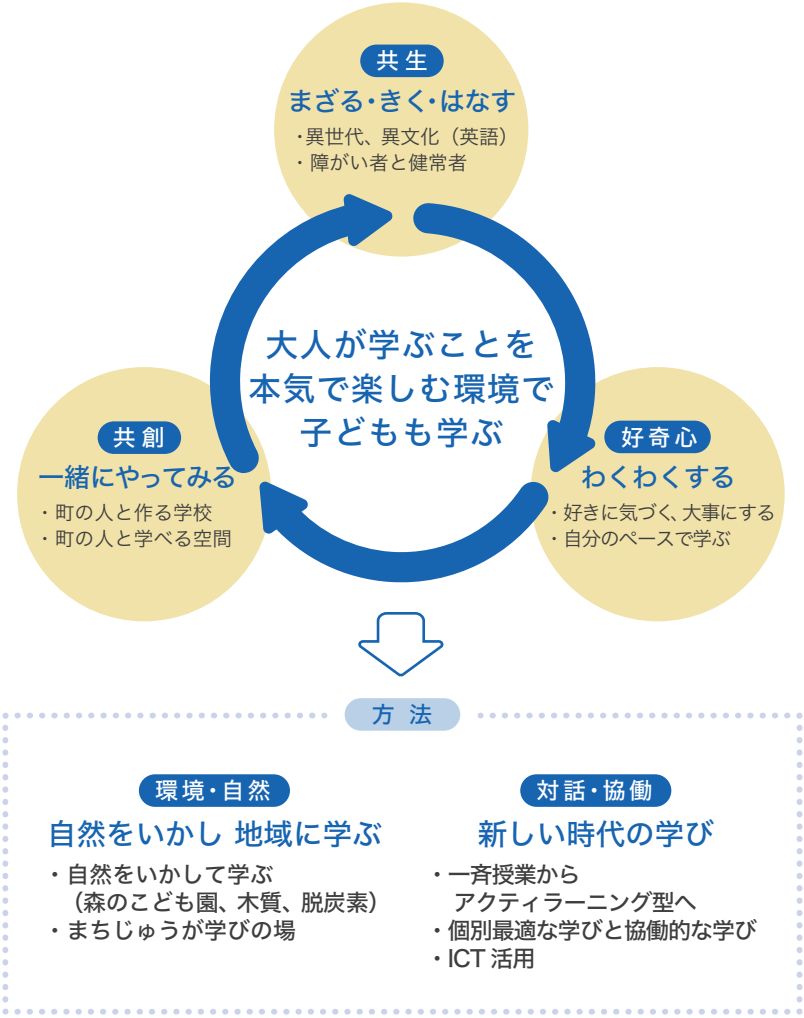


図 . 学びの場の教育理念

教育理念

理念①共生　- すべての子どもたちの居場所 -

・障害のあるなし、年齢、国籍、家庭環境にかかわらず、安心して居場所がみつけられる
・教室の外でもどこでも学びの場になる、好きな居場所がみつけられる、ひとりになりたい時にも居場所がある
・多様性の視点を、様々な属性の人たちとの共生を通して学ぶことができる

理念②好奇心　- 好きなことや個性を大切にできる多様性が尊重される学びの場 -

・好きなことに気づく出会いがある
・ワクワクする気持ちを大切に関心のあることを伸ばすことができる
・地域のさまざまな仕事に携わる大人と出会うことができる

理念③共創　- まちの人とともにつくる学びの場 -

・大人が学ぶことを本気で楽しむ環境で子どもも学ぶ
・地域と学校、子どもと幅広い世代の大人が、まざり、つながるコミュニティスクール
・住民参加型で考え、運営できる

方法①自然・環境

-SDGs・ゼロカーボン社会を見据えた環境教育の体現の場 -

・再生可能エネルギーや薪ストーブの導入など、森林資源を活用しながらゼロカーボン社会を見据えた視点が学べる
・屋内外の空間や体験により環境教育を体現できる

- 施設の木質化 -

・施設の木質化を図ることでゼロカーボン社会に貢献するとともに、地域の豊かな自然環境が身近に感じることができる

方法②対話・協働

- 主体的で対話的な深い学びを実現する学びの場 -

・教える、教えられるの関係ではなく、ともに学び合うことができる
・人との出会いや対話を通して学ぶことができる

- 多様な学び方や暮らし方に柔軟に対応できる場 -

・多様な学び方を可能にする
・将来の暮らしや学び方の変化に柔軟に対応できる

4-3. 義務教育学校について

義務教育学校の概要

(1)形態・・・・ 中頓別小学校と中頓別中学校が統合した 9 年間の義務教育学校
(2)管理職・・・ 校長 1 名、教頭 2 名
(3)児童生徒数(令和 8 年度予想)・・ 小学校児童数 61 名、中学校生徒数 28 名、合計 89 名
(4)教職員数(令和 8 年度予想)・・・ 33 名
(5)カリキュラム編成・・・・・・・ 教育区分「4-3-2 制」

表 . 義務教育学校のカリキュラム編成

	こども園			義務教育学校								
学年	年少	年中	年長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
区分								中期			後期	
	幼小乗り入れ							小中乗り入れ			中学	
				学級担任制				一部教科担任制			教科担任制	
	異学年交流の実施											

考え方

中学校が抱える施設の老朽化の問題を解決しつつ、幼小中が連携した学校づくりを推進するため、小中学校校舎を新築・改修により集約し義務教育学校を設置します。また、既存の認定こども園が隣接することにより、本町が取り組む自然教育、英語教育などを柱に幼小中一貫教育を推進します。

また、町立図書館や文化行事を実施する多目的ホール、カフェスペースなどまちの社会教育施設と学校施設を一体型の施設とすることで、大人を含めた地域の学び合いの空間の中に子どもたちをおくコミュニティスクールを体現する全世代型の学びの拠点づくりを目指します。

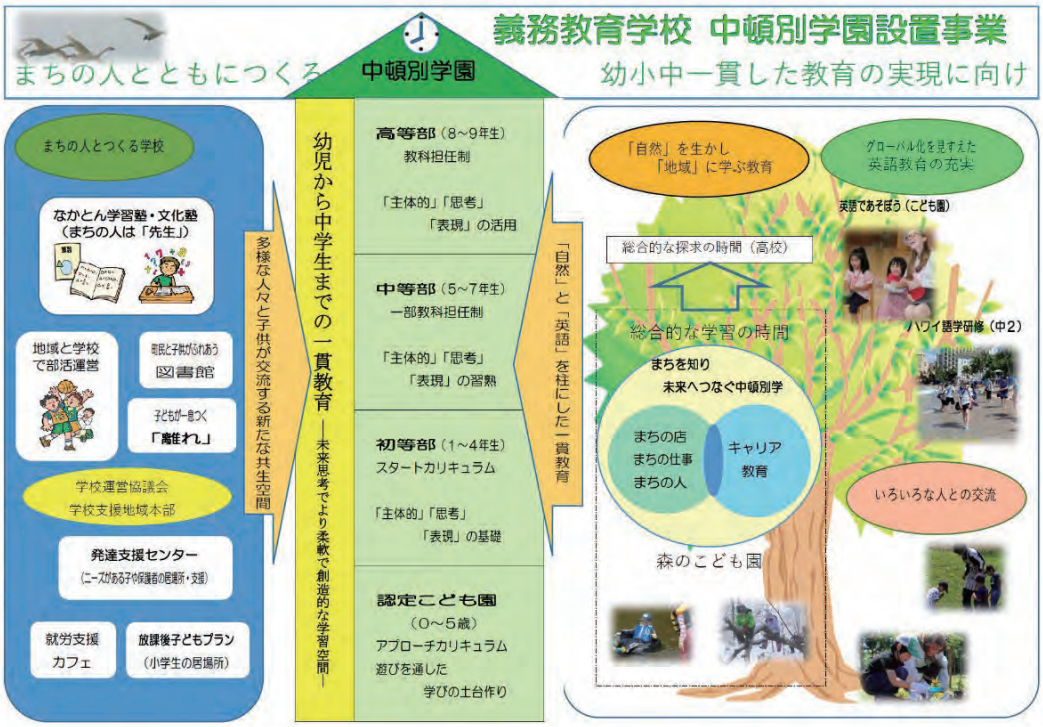


図 . 義務教育学校のコンセプト図

施設の構成

配置計画、導線計画の検討をする際に以下について重視します。

(1)義務教育学校のあり方

・将来の児童生徒数の変動や教育内容、教育方法等の変化に対応できるよう、大小の教室を設け、柔軟性を持たせた構造とします。
・アクティブラーニング、探求学習など、主体的、対話的な深い学びを支援する、多様な学び方に対応した柔軟な施設となるよう計画します。
・教室だけではなく、屋外空間を活用したり、建物全体にオープンスペース・展示コーナー・多目的室・特別支援教室・ICT 教育環境を散りばめたりすることで、施設全体で活動や学びができるよう計画します。
・少人数習熟度別教育が実施できるよう、学年に合わせた最適な教室配置とオープンスペースをつくります。また、特別な支援を要する児童生徒や不登校・引きこもりがちな児童生徒も学べる環境を整備することで、全ての生徒が学びの機会を得られる教室配置とします。

(2)社会教育施設及び学校・地域で共用する施設のあり方

・図書館を学び場の中核とし、単なる本を置く場ではなく、学びと交流と創造の拠点、まちの人とともに作る「学びの広場」として計画します。学びの広場は大きなワンルームとして考え、四方から子どもも大人も学びの広場に集まるよう配置します。
・学びの広場の周囲に交流、地域交流、子育てなどのゾーンを連携させることで、多世代が集まり、互いに教え学び合う場所、自分の好きなことを見つけられる場所とします。
・特別教室は学びの広場に面するように一体的に計画し、児童生徒だけではなく一般の住民が社会教育施設として共用できるよう配置します。

図 . 施設の構成図

施設の整備コンセプト

方針１　地域の学びや活動の拠点となるにぎわいのある施設

・社会教育施設と学校施設が一体的につながる全町民にとっての学びの場づくり
・子どもの特性や障害のあるなし、また世代などにかかわらず誰もが居場所をみつけられる場づくり
・本を中心に様々な学びや活動が展開する場づくり

方針２　地域の自然の豊かさや環境を五感で感じ、ゼロカーボン社会を体現する施設

・施設の木質化や薪ストーブ等の導入また、エネルギーの利用状況及び設備の見える化など、環境教育の場となる屋内外の空間デザイン
・道産木材を基本とし、可能な限り中頓別産木材（樹種も多様に）を活用する木質化計画

方針３　多様な学習を可能にする多機能な施設整備

・アクティブラーニング、探求学習など、主体的、対話的な深い学びを支援する、多様な学び方に対応した柔軟な施設整備
・施設の至るところで対話や活動や思索できるスペースや什器があり、屋外空間を含め、教室だけでなく施設全体が活動や学びの場とできる施設整備
・郷土資料や授業のアーカイブなど、教職員が授業などの準備のために活用できる情報拠点としての図書館の整備

方針４　空間の集約・共有による施設のコンパクト化

・既存小学校校舎及び町民センターなど既存施設を活用した新旧一体の施設計画
・学校施設及び社会教育施設を集約するとともに、空間を多様な用途や機能で共用する施設のコンパクト化

方針５　積雪地域の特性を考慮した施設

・冬季の室内空間の快適性、除雪計画や積雪の耐荷重、靴や上着の収納など、積雪地域での快適性や安全性を考慮した施設整備
・積雪時の移動も考慮した、さまざまな空間をひとつながりのものとする施設整備

方針６　居心地がよく快適に学べる教育環境

【空間】
・少人数・習熟度別指導に対応した教室配置
・アクティブラーニング型の授業や展示等ができるオープンスペース及びワークスペースの設置
・また不登校や引きこもりがちな子どもを含め、すべての子どもに居場所があり、教室以外の場所でも学ぶことのできる場づくり

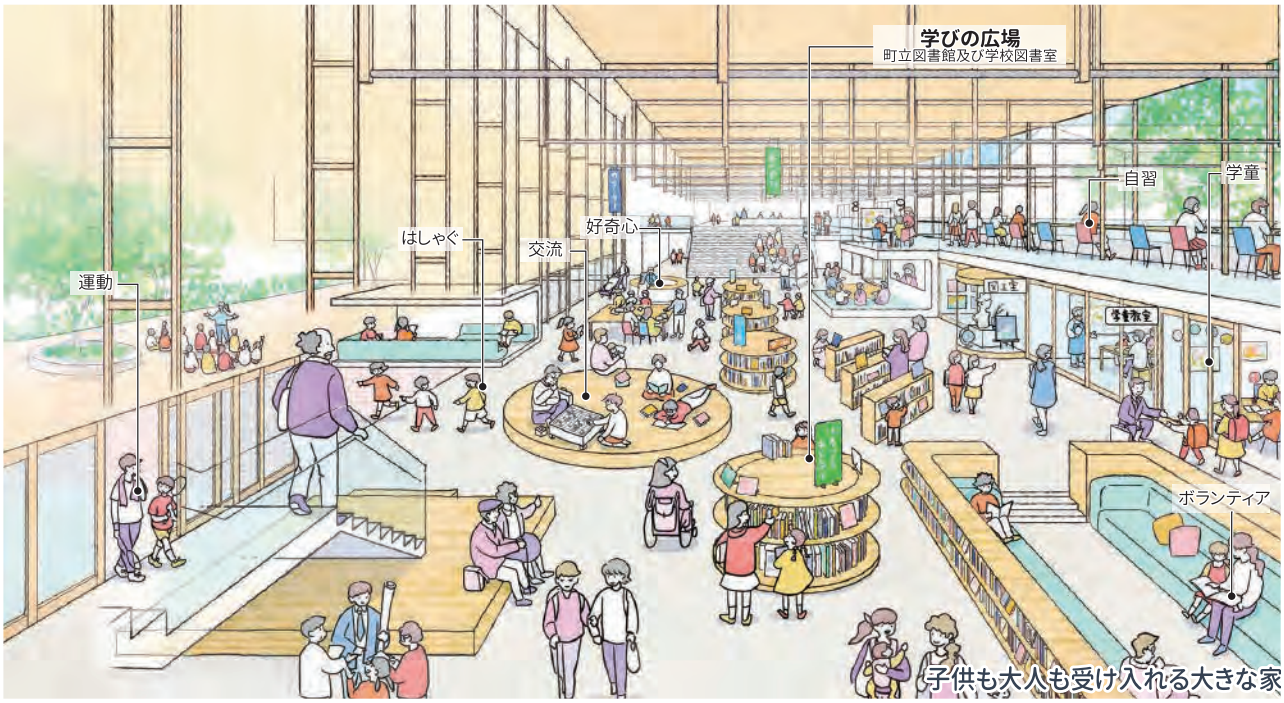
【ICT】
・ICT（情報通信技術）を活用し、子どもたちの主体的で個別的な学びに対応したり、教職員の働き方改革に寄与する設備計画

【バリアフリー】
・すべての人が安全かつ円滑に学校生活を送ることができる良好な環境の整備
・特別な支援を要する児童・生徒が、多様な人たちとともに学べるとともに、必要な時は授業に集中できる環境の整備

方針７　安全・安心な施設環境

・歩車分離に配慮した配置計画及び施設形状、通学経路、スクールバス内容等を勘案した安全で安心な通学経路の確保
・社会教育施設と学校教育施設の共用、および地域と学校の協働の視点も大切にするとともに、地域で子どもたちを見守るセキュリティ計画

4-4. ビジュアルイメージ



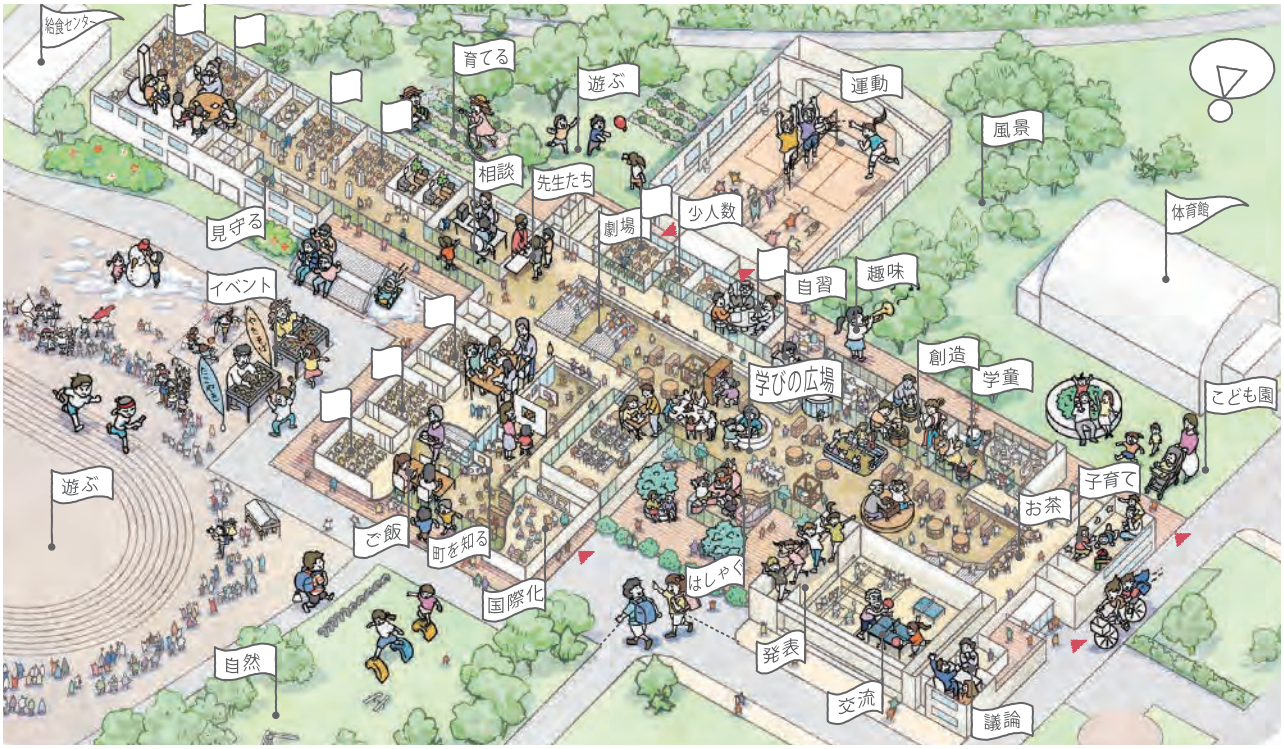


図 . イメージ案